

平成20年度第1回対馬暖流系アジ・サバ・イワシ長期漁海況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
西海区水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(2008年10月～2009年3月)のポイント

海況

- (1) 薩南海域における黒潮北縁域の位置は、「屋久島南付近での変動」で経過する。
- (2) 東シナ海から九州・日本海西部沿岸域にかけての表層水温は、「平年並み～やや高め」で経過する。

※引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温の高低の程度は以下のとおり。

「やや」 : 約3年に1回程度の出現確率

「平年並み」 : 約2年に1回程度の出現確率

今後の見通し(2008年11月～2009年3月)のポイント

漁況(来遊水準)

- (1) マアジは前年を上回る。
- (2) マサバは前年並み。
- (3) ゴマサバは前年並み。
- (4) マイワシは前年を下回る。
- (5) ウルメイワシは前年を下回る。
- (6) カタクチイワシは前年並み。

問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課 沿岸資源班

担当 : 大隈、和田、染川

電話 : 03-3502-8111(内線6800)、直通電話 : 03-6744-2377、ファックス : 03-3592-0759

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.jfa.maff.go.jp/j/press/>

独立行政法人水産総合研究センター 西海区水産研究所 業務推進部

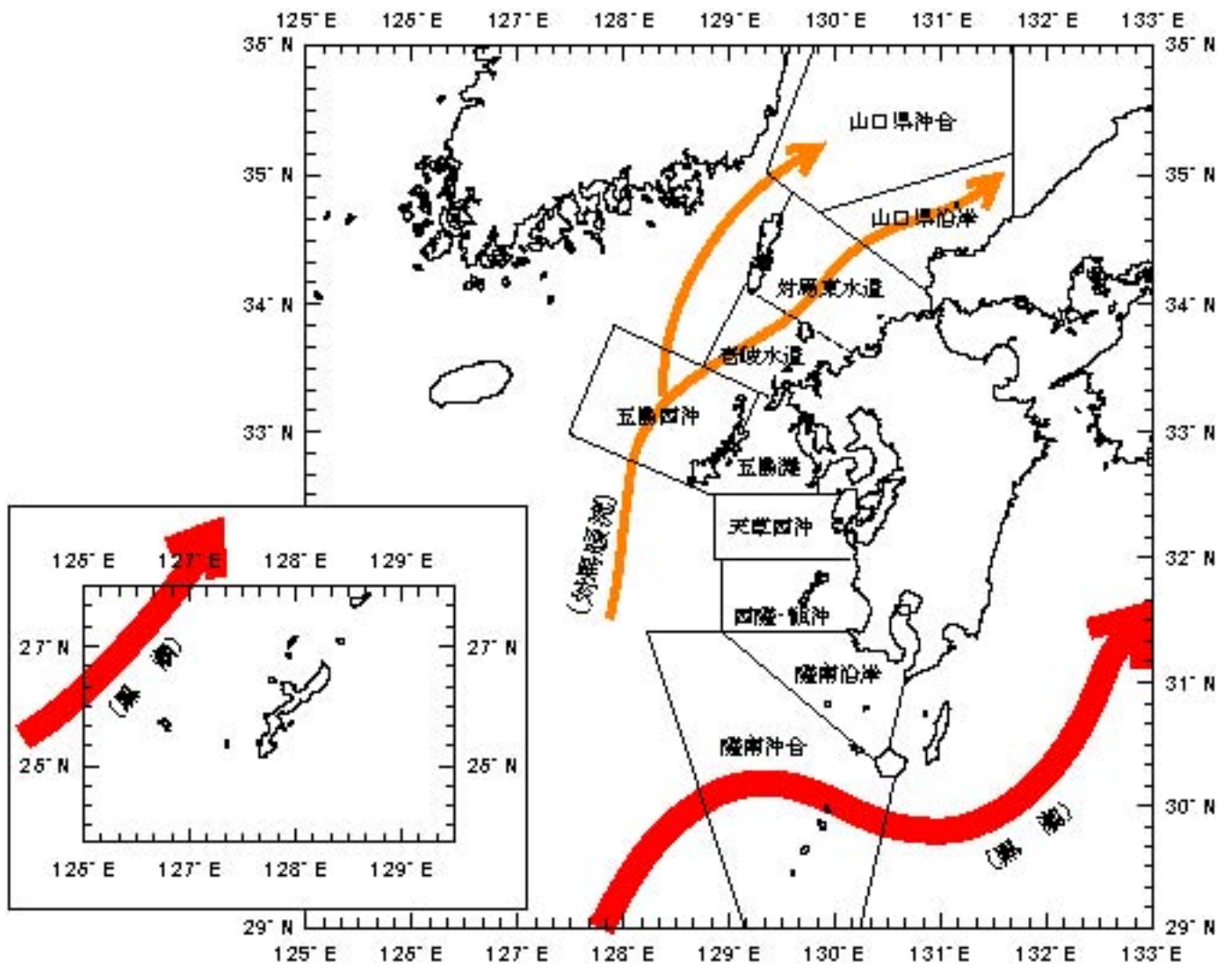
電話 : 098-860-1600、ファックス : 095-850-7767

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://snf.fra.affrc.go.jp/>

予報対象海域



西海ブロック海況予報

1. 今後の見通し（2008年10月～2009年3月）

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域の位置は、11月には「接岸傾向」となるが、全般的には「屋久島南付近での変動」で経過する。

(2) 表層水温

山口県沿岸・沖合、対馬東水道、壱岐水道、五島西沖、五島灘、天草西沖、西薩・甕沖、薩南沿岸、黒潮域、沖縄島周辺海域、大陸棚上では、「平年並み～やや高め」で経過する。

2. 経過（2008年4月～9月）

1. 大陸棚上

(1) 海面水温

北部：4～6月「やや低め」、7月「やや高め」、8・9月「かなり高め」。

南部：4月「はなはだ低め」、5月「平年並み」、6月「やや高め」、7～9月「かなり高め」。

2. 黒潮流域

(1) 海流

沖縄北西方の黒潮の流路は、春季、夏季ともに平年並み。流量は、春季は平年より少なめ、夏季は平年並みで経過。

薩南海域における黒潮北縁域は、4月「接岸傾向」、5月「離岸傾向」、8月「接岸傾向」、9月「離岸傾向」、他の月は「屋久島南付近での変動」で経過。

(2) 海面水温

4～6月「やや高め」、7月「かなり高め」、8月「やや高め」、9月「かなり高め」。

3. 対馬暖流域・沿岸域

(1) 表層水温

山口県沖合：4月「やや高め」、5月「平年並み」、6月「やや高め」、7月「平年並み」、8月「やや高め」、9月「平年並み」。

山口県沿岸：4月「かなり高め」、5・6月「やや高め」、7月「やや低め」、8月「かなり高め」、9月「平年並み」。

対馬東水道：4月「やや高め」、5・6月「平年並み」、7月「やや低め」、8月「かなり高め」、9月「平年並み」。

壱岐水道：4・6月「平年並み」、8月「やや高め」。

五島西沖：4月「平年並み」、8月「やや高め」。

五島灘：4・6・8月「やや高め」。

天草西沖：4月「やや低め」、5・6・8月「やや高め」。

西薩・甕沖：4・5月「平年並み」、8月「やや高め」。

薩南沿岸：4月「やや低め」、5月「平年並み」、8月「かなり高め」。

薩南沖合：4月「平年並み」、5月「かなり低め」、8月「やや高め」。

沖繩島南東：4月「やや高め」、5月「平年並み」、6月「やや低め」、7・8月「平年並み」。

(2) 表層塩分

山口県沖合：4～7月「平年並み」、8月「やや高め」、9月「平年並み」。

山口県沿岸：4～9月「平年並み」。

対馬東水道：4・5月「平年並み」、6月「やや低め」、7～9月「平年並み」。

壱岐水道：4・6・8月「平年並み」。

五島西沖：4月「やや低め」、8月「平年並み」。

五島灘：4月「平年並み」、6月「かなり低め」、8月「平年並み」。

天草西沖：4・5月「平年並み」、6月「やや低め」、8月「平年並み」。

西薩・甌沖：4・5・8月「平年並み」。

薩南沿岸：4月「平年並み」、5月「やや低め」、8月「平年並み」。

薩南沖合：4月「やや低め」、5月「かなり低め」、8月「平年並み」。

沖繩島南東：4月「やや低め」、5月「かなり低め」、6～8月「やや低め」。

3. 現況（2008年9月下旬）

(1) 大陸棚上

海面水温は北部「はなはだ高め」、南部「かなり高め」。

(2) 黒潮流域

薩南海域の黒潮北縁域は「離岸傾向」。海面水温は「やや高め」。

(3) 対馬暖流域

海面水温は「かなり高め」。

（註）引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温・塩分の高低の程度は以下のとおり。

「はなはだ」：約22年に1回程度の出現確率

「かなり」：約7年に1回程度の出現確率

「やや」：約3年に1回程度の出現確率

「平年並み」：約2年に1回程度の出現確率

東シナ海～日本海西南域あじ・さば・いわし長期漁況予報

今後の見通し（2008年11月～2009年3月）

対象海域：東シナ海～日本海西南海域

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2008年級群（2008年生まれ））、1歳魚（2007年級群）、2歳魚（2006年級群）。

魚の大きさは、あじ・さばは尾叉長、いわしは被鱗体長で表示。

1. マアジ

(1) 来遊量：前年を上回る。

(2) 漁期・漁場：沖合域の漁況は低調だった前年を上回り、沿岸域の漁況は前年・平年並み。

(3) 魚体：10～19cmの0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）及び19～24cmの1歳魚（小銘柄）が主に、24cm以上の2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。

2. マサバ

(1) 来遊量：前年並み。

(2) 漁期・漁場：沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年・平年並み。

(3) 魚体：25～28cmの0歳魚（豆銘柄）及び29～32cmの1歳魚（小銘柄）が主に漁獲される。

3. ゴマサバ

(1) 来遊量：前年並み。

(2) 漁期・漁場：沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年・平年並み。

(3) 魚体：25～30cmの0歳魚（豆・小銘柄）及び29～33cmの1歳魚（小銘柄）が主に漁獲される。2月以降には、沿岸域で33～40cmの2歳魚以上（中・大銘柄）が主に漁獲される。

4. マイワシ

(1) 来遊量：前年を下回り、平年を上回る。

(2) 漁期・漁場：長崎県以北の沿岸域が主な漁場となる。

(3) 魚体：15～20cmの0～2歳魚（中羽・大羽銘柄）が主に漁獲される。

5. ウルメイワシ

(1) 来遊量：前年を下回り、平年並み。

(2) 漁期・漁場：漁期前半を主体に、長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：15～25cmの0～1歳魚（中羽・大羽銘柄）が主に漁獲される。

6. カタクチイワシ

(1) 来遊量：前年並みで、平年を上回る。

(2) 漁期・漁場：漁期は後半が主体で、漁場は沿岸域が中心となる。

(3) 魚体：10cm程度の0歳魚（大羽銘柄）が主に、5cm程度の0歳魚（小羽銘柄）も漁獲される。

注：「前年」は2007年11月～2008年3月。「平年」は過去5年の平均値。「沖合域」は大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2008年4月～8月）および見通しについての説明

1. 資源状態

(1) マアジ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するマアジの資源量は、1970年代後半に低水準にあったが、1980～1990年代前半に増加し、1993～1998年には近年では高い水準を維持した。1998～2000年の加入量減少のため資源は減少傾向を示したが、2001～2004年の加入量は1994～1997年の水準に回復し、2002～2004年には資源量も増加傾向を示した。しかし、2005～2007年の加入量は近年では低い水準だったとみられ、2005年に減少した資源量は2006、2007年と同水準にとどまっている。

東シナ海・日本海（青森県～鹿児島県）での我が国のマアジ漁獲量は、1973～1976年には9～15万トンであったが、その後減少し、1980年に4万トンまで落ち込んだ。1980～1990年代は増加傾向を示し、1993～1998年には約20万トンを維持したが、1999～2002年には13～16万トンに減少した。2003年から漁獲量は再び増加し、2004年には19万トンであったが、2005年以降は減少し、2007年は12万トンであった。

(2) マサバ対馬暖流系群

東シナ海・黄海・日本海に生息するマサバの資源量は、1970・80年代には比較的安定していたが、1992～1996年に増加傾向を示した後、1997年に急減し、1999～2007年は低い水準で横ばい傾向にある。

東シナ海・黄海・日本海での我が国のマサバの漁獲量は、1970年代後半には27万～30万トンであったが、その後減少し、1990～1992年には13万～15万トンと大きく落ち込んだ。1993年以降、漁獲量は増加傾向を示し、1996年には41万トンに達したが、1997年には21万トンに大きく減少し、2000年にかけてさらに減少した。2000年以降、漁獲量は8万～11万トンの低い水準で推移し、2007年は106千トンであった。

(3) ゴマサバ東シナ海系群

東シナ海から日本海西部に分布するゴマサバの資源量は、1992～2007年に比較的安定して同程度の水準を保っている。近年では、2004～2006年級群の高い加入量のため、資源量は2005、2006年に高い値を示したが、2007年はやや減少した。

東シナ海・日本海での我が国のゴマサバの漁獲量は、年変動はあるものの、1980年代以降およそ5万トン前後で推移していたが、2004年には31千トン、2005年には76千トンと、近年は変動がやや大きい。2007年の漁獲量は54千トンであった。

(4) マイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するマイワシの資源量は、1970年代に増加し、その後1980年代にかけて高い水準にあったが、1990年代に急激に減少し、2001年には過去最低水準となった。2004年以降は極めて低い水準ながらも増加傾向にある。

東シナ海・日本海での我が国のマイワシの漁獲量は、1983年から1991年までは100万トン以上と多か

ったが、その後、急激に減少した。2001～2003年に漁獲量は1千トン程度で推移した。2004年以降は増加傾向にあり、2007年の漁獲量は14千トンであった。

(5) ウルメイワシ対馬暖流系群

対馬暖流域において、1970年代後半と1980年代後半に資源量が多く、1980年代前半および1990年代後半には少なかった。1990年代後半から2000年まで資源量は漸減傾向にあったが、2001年以降はやや増加している。

(6) カタクチイワシ対馬暖流系群

1970年代および1980年代には資源変動は比較的安定していたが、1990年以降に資源量が徐々に増加しはじめ、1997～1999年はきわめて高い水準にあった。2000年以降は、資源量は再び安定して推移していると考えられる。

2. 漁況の経過

2008年4～8月の大中型まき網漁業の漁場は、対馬沖、五島西沖、東シナ海中部および東シナ海南部が中心であった。この間の大中型まき網漁船の九州主要港への水揚量は、全魚種合計4万1千トンで前年(2007年4～8月、3万3千トン)を上回った。マアジは2万1千トンで前年(9千トン)を上回り、さば類は1万トンで前年(1万5千トン)を下回った。

山口県～鹿児島県地先における沿岸漁業の漁況は、表1のような経過であった。マアジの漁獲量は、北部(山口県～長崎県)においては前年・平年並みから下回っていたのに対し、南部(熊本県・鹿児島県)では前年・平年を上回った。漁獲の主体は15～25cmの1歳魚と15cm以下の0歳魚であった。マサバは、海域によって差があるが、概ね前年並みで、平年を上回った。漁獲の主体は30cm以下の0～1歳魚であった。ゴマサバは、前年・平年を下回った。4～6月は34～39cmの3～4歳魚が主に、20cm以下の0歳魚も漁獲され、7月以降は30cm以下の0～1歳魚が主に漁獲された。マイワシは、北部(山口県～長崎県)では前年・平年を上回ったが、熊本県・鹿児島県では前年・平年を下回った。全体としては前年を下回り、平年を上回った。漁獲の主体は、前半では15～19cmの1・2歳魚(2006・2007年級群)であり、後半では15cm以下の0歳魚(2008年級群)であった。ウルメイワシは福岡県で前年を上回ったが、その他の県では前年を下回った。漁獲の主体は、前半には16～23cmの1・2歳魚(2006・2007年級)で、後半には5～15cmの0歳魚(2008年級)であった。カタクチイワシは熊本県・鹿児島県で前年を上回り、福岡県で下回った。水揚げの主体を占める長崎県では前年並みであった。漁獲の主体は前半には9～15cmの1・2歳魚(2006・2007年級)で、後半には5～10cmの0歳魚(2008年級)であった。

3. 今後の見通しの説明

(1) マアジ

11～3月期には0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）と1歳魚（小銘柄）が漁獲の主体で、2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。2007年級群は2006年級群と同程度の豊度と考えられる。2008年級群については、2008年2～4月に東シナ海南部～九州沿岸域で行った仔稚魚分布調査、6月に東シナ海～山陰沿岸域で行った幼稚魚分布調査では前年を上回った。8月に行なわれた計量魚群探知機を用いた分布調査の結果からは、2008年級群は2007年級群と同程度の豊度と考えられた。これらから、0歳魚（2008年級群）は前年と同程度か上回り、1歳魚（2007年級群）と2歳魚（2006年級群）は前年並みで、全体の来遊量は前年を上回ると見積もられる。

沖合域の漁況の指標となる大中型まき網のCPUE（1日1隻当り漁獲量）は、2005年以降は減少しており、低い水準にある（参考図参照）。一方、沿岸域の漁況の指標となる代表的な沿岸漁業の漁獲量は安定している。来遊量が前年を上回ることを反映して、沖合域の漁況は低調だった前年を上回り、沿岸域の漁況は前年・平年並みと考えられる。

(2) マサバ

例年、11～3月期には0歳魚（豆銘柄）と1歳魚（小銘柄）が漁獲の主体となる。2006年級群の豊度は2005年級群と同程度で、2007年級群の豊度は2006年級群と同程度とみられる。2008年級群の評価は難しいが、漁況の経過から2007年級群と同程度かそれよりもやや高い豊度とみられる。これらから、0歳魚（2008年級群）は前年並みかやや上回り、1歳魚（2007年級群）は前年並み、2歳魚（2006年級群）は前年並みで、全体の来遊量は前年並みと考えられる。

来遊量が前年並みであることを反映して、沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年・平年並みと考えられる。

(3) ゴマサバ

例年、11～3月期には0歳魚（豆・小銘柄）と1歳魚（小銘柄）が漁獲の主体となる。2006年級群の豊度は2005年級群より低く、2007年級群の豊度は2006年級群と同程度とみられる。2008年級群の評価は難しいが、漁況の経過から2007年級群より高い豊度とみられる。これらから、0歳魚（2008年級群）は前年を上回り、1歳魚（2007年級群）は前年並み、2歳魚（2006年級群）は前年を下回り、全体の来遊量は前年並みと考えられる。

来遊量が前年並みであることを反映して、沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年・平年並みと考えられる。

(4) マイワシ

2008年夏季に行った計量魚群探知機調査では、魚群量の指標値は前年と同程度であったが、平年を上回った。沿岸漁業（山口県～鹿児島県地先）の漁況の経過からは、今後の来遊量は平年を上回るものの、前年を下回る可能性が高いと考えられる。これらのことから総合的に判断すると、今後の来遊量は前年を下回り、平年を上回ると考えられる。また、4～8月期の漁況より、漁場は長崎県以北の沿

岸域が中心となり、魚体は15～20cmの0～2歳魚（2006～2008年級）が主体となると考えられる。

(5) ウルメイワシ

2001～2002年に加入がやや良く、来遊水準は一時的に上向いたものの、その後は漸減傾向が続いている。2008年夏季に行った計量魚群探知機調査では、魚群量の指標値は前年並みであった。2007年の4～8月における各県の水揚量は前年を大きく上回り、2007年級群は2006年級群より豊度が高かったと考えられる。今後の来遊量は2008年級群の加入量と2007年級群の産卵親魚量によって決まると考えられる。2007年級群は近年では高い水準であるが、2008年級群は漁況の経過から前年を下回ると考えられる。11～3月期の来遊水準は4～8月期の来遊水準と正の相関があり、4～8月期の来遊水準が前年を大きく下回ったため、11～3月期は前年を下回り、平年並みと考えられる。

(6) カタクチイワシ

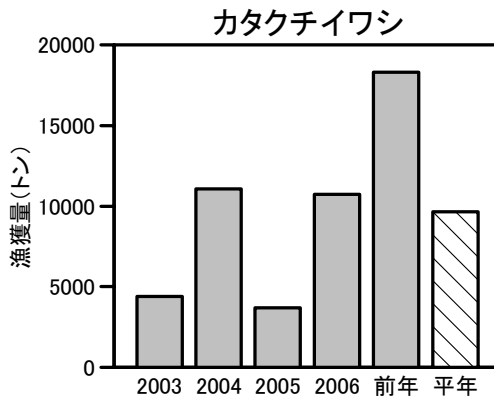
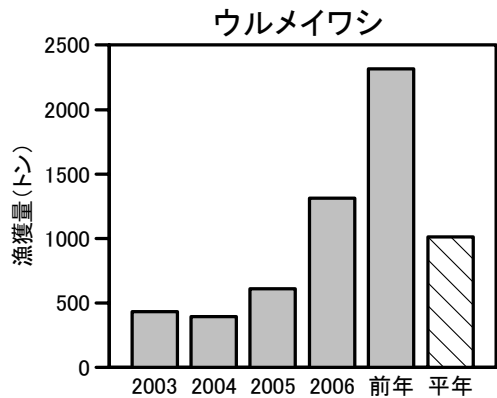
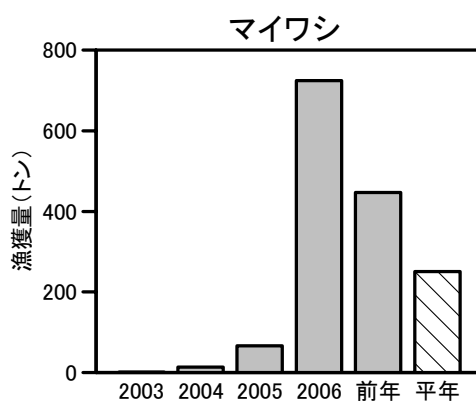
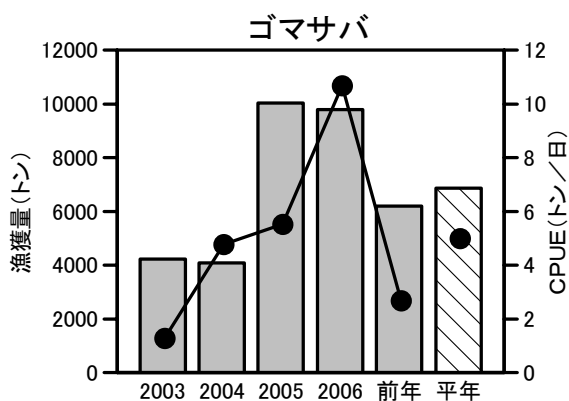
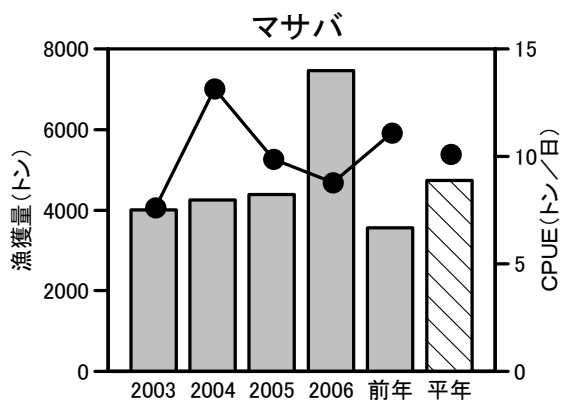
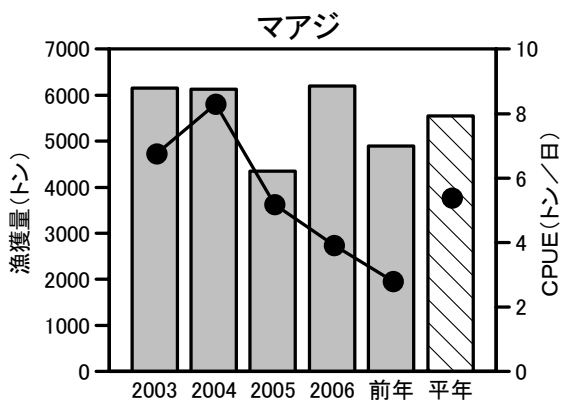
2005年から2008年までの1～3月に大羽イワシの来遊が多く、これらの年の春期発生群の加入はやや良かった。夏季に行った計量魚群探知機調査では、2007年の魚群量の指標値は近年では高かったものの、2008年は前年を下回った。今期の来遊水準は2008年級群（カエリ・小羽銘柄）と、1月以降の2007・2008年級群（大羽銘柄）の来遊水準によって決まる。経験的に11～3月期の来遊水準は、4～8月期の来遊水準と負の相関を持ち、4～8月期の来遊水準が良かったために、11～3月期はあまり期待できない。ただし、近年の資源量は中位増加で安定しているため、前年並みで平年を上回ると考えられる。

表 1. 沿岸域の漁況経過 (2008 年 4~8 月、一部 3 月を含む)

	マアジ	マサバ	ゴマサバ
山口	<p>中型まき網で 1,562 トンの水揚げがあり、前年比 78%、平年比 83%であった。湊地区の浮敷網（棒受網、すくい網）では、ゼンゴが 6 月を中心に 4 トン水揚げされ、前年比 80%、平年比 46%であった。江崎地区ではすくい網、小型まき網とも水揚げはなかった。</p>	<p>中型まき網で 389 トンの水揚げがあり、前年比 46%、平年比 149%であった。湊地区の浮敷網では水揚げがなかった。江崎地区では 0.14 トンで、前年比 70%、平年比 81%であった。</p>	
福岡	<p>代表港まき網漁獲量は 196 トンで、前年比 19%、平年比 19%とかなり不漁であった。例年漁獲の中心となるゼンゴ、小といった 1 歳魚銘柄が非常に少なかった。棒受網の漁獲量は 19 トンで、前年比 26%、平年比 18%とかなり不漁。</p>	<p>代表港まき網漁獲量は 204 トンで、前年比 40%、平年比 85%と好漁であった前年は下回ったが平年並みであった。銘柄ではギリ、マメの当歳魚が中心。棒受網の漁獲量は 5 トンで、前年比 13%、平年比 38%と不漁であった。</p>	<p>代表港まき網漁獲量は 7 トンで、前年比 3%、平年比 13%と不漁であった。</p>
佐賀	<p>前年並みで、平年を下回った。(前年比 92%、平年比 67%)</p>	<p>前年・平年を上回った。 (前年比 147%、平年比 211%)</p>	
長崎	<p>地域により差があるが、概ね前年・平年並みであった。 (前年比 120%、平年比 120%)</p>	<p>前年・平年を上回った。 (前年比 150%、平年比 200%)</p>	
熊本 牛深港	<p>水揚量は 248.7 トンで前年比 328%、平年比 183%であった。</p>	<p>水揚量は 649.0 トンで前年比 239%、平年比 192%であった。</p>	
鹿児島	<p>主要 4 港のまき網で、4~6 月は豆、小アジ (2007 年級群) 主体、7~8 月はアジ仔 (2008 年級群) 主体に、小アジ (2007 年級群)、中アジ (2006 年級群以上) の漁獲があった。特に 7~8 月はアジ仔 (2008 年級群) の加入があり前年・平年を大幅に上回った。期間中合計で 2,076 トンの水揚げで、前年・平年を上回った。 (前年比 325%、平年比 180%)</p>		<p>主要 4 港のまき網で、4~6 月は薩南海域が主漁場となり、ゴマサバ中 (2004 年級群・2005 年級群) 主体で前年・平年を下回って低調に推移し、7~8 月はゴマサバ豆 (2007 年級群) 主体に北薩海域、薩南海域で漁場が形成され前年を上回る漁模様となった。期間中合計で 5,768 トンの水揚げで、前年・平年を下回った。 (前年比 72%、平年比 79%)</p>

	マイワシ	ウルメイワシ	カタクチイワシ
山口	中型まき網での水揚量は6月を中心に36トンで、前年比203%、平年比279%と前年・平年を上回った。湊地区では浮敷網で8月にヒラゴが0.02トン水揚げされたのみで、前年比33%、平年比0.1%と前年・平年を大幅に下回った。江崎地区では7月にすくい網で中羽が0.03トン水揚げされたのみで、前年は漁獲がなく、平年比48%であった。	湊地区の浮敷網の水揚量は7トンで、前年比13%、平年比4%と前年・前年を著しく下回った。江崎地区では7月にすくい網で小・中羽が0.03トン水揚げされたのみであった。	湊地区の浮敷網の水揚量は1,732トンで、前年比105%、平年比114%と前年・平年並みであった。今期は6~8月の小・中羽銘柄の水揚げが顕著で、同銘柄水揚量は1,106トンであった。江崎地区では6~8月にすくい網、小型まき網で129トンが水揚げされ、前年比160%、平年比95%であった。
福岡	代表港まき網漁獲量は292トンで、前年比579%、平年比1,074%と好漁であった。棒受網の漁獲量は45トンで、前年比46%、平年比220%であり、好漁であった前年を下回ったが、平年は大きく上回った。沿岸の小型定置網ではほとんど漁獲されなかった。	代表港まき網漁獲量は348トンで、前年比342%、平年比216%とやや好漁であった。棒受網の漁獲量は27トンで、前年比174%、平年比329%とまき網同様好漁であった。	棒受網の漁獲量は105トンで、前年比65%、平年比94%と、やや前年を下回ったが、平年並みであった。
佐賀	7、8月に棒受け網漁業で例年にないほど多く漁獲された。(前年比885%、平年比2401%)	7月にわずかに漁獲されたのみであった。(前年比3%、平年比5%)	前年並みで、平年を下回った。(前年比117%、平年比70%)
長崎	一部の地域では比較的まとまった漁獲も見られたが、前年同様、低調に推移した。	地域により差があるが、概ね前年を下回り、平年並み。 (前年比49%、平年比99%)	地域により差があるが、概ね前年・平年並みであった。 (前年比93%、平年比93%)
熊本 牛深港	水揚量は5.27トンで前年比2%、平年比8%であった。	水揚量は84.9トンで前年比23%、平年比19%であった。	水揚量は2,311.1トンで前年比205%、平年比203%であった。
鹿児島	まとまった来遊は無かった。主要4港のまき網で42.5トンの水揚げで、前年比2%、平年比12%と前年・平年を大きく下回った。北薩海域の棒受網でも5.4トンの水揚げで、前年比9%、平年比37%と前年・平年を大きく下回った。	主要4港のまき網では705.1トンの水揚げで、前年比28%、平年比83%と前年を下回り、平年並みとなった。北薩海域の棒受網では475.4トンの水揚げで、前年比66%、平年比77%と前年・平年を下回った。	八代海で漁場が形成され、好調に推移した。主要4港のまき網では1,843.2トンの水揚げで、前年比277%、平年比491%と前年・平年を大きく上回った。北薩海域の棒受網では397.8トンの水揚げで、前年比66%、平年比94%と前年を下回り平年並みとなった。

注：「前年」は2007年4~8月、「平年」は過去5年の平均値。



今後の見通し参考図

沿岸漁業の漁獲量（沿岸漁況の指標の一つ；棒グラフ）と大中型まき網の1日当たりの漁獲量（沖合漁況の指標の一つ；折れ線グラフ、CPUE）。沿岸漁業の漁獲量は、マサバは山口県～熊本県（ゴマサバを含むが主にマサバ）、ゴマサバは鹿児島県（マサバを含むが主にゴマサバ）、その他は山口県～鹿児島県の主要沿岸漁業漁獲量。11月～翌年3月。平年は過去5年平均。

参 画 機 関

山口県水産研究センター	沖縄県水産海洋研究センター
福岡県水産海洋技術センター	社団法人 漁業情報サービスセンター
佐賀県玄海水産振興センター	水産庁 増殖推進部 漁場資源課
長崎県総合水産試験場	独立行政法人 水産総合研究センター 西海区水産研究所
熊本県水産研究センター	
鹿児島県水産技術開発センター	